中国の高校生における情報モラル意識に影響を及ぼす要因
－電子メール使用時のマナー意識形成を中心に－

The Influencing Factors of Information Morals in Chinese Senior High School Students: Focusing on Appropriate Behaviors in Email Communications

畑野　裕子*　　森山　潤**　　金　楠***
Yuko HATANO　　Jun MORIYAM　　Nan KIN

＜要旨＞
In this research, the influencing factors of information morals in Chinese senior high schooI students was examined from the view point of grasping learner's readiness for Informatics Education. The survey focusing on consciousness for appropriate behaviors in e-mail communications was conducted on 217 3rd graders of senior high school in China (Chilin-province), and was compared with the consciousness of 3rd graders of high school in Japan (Hyogo-ken). As a result, it was indicated that 3rd graders of Chinese high school aimed at only restraining the fault of the email, however, they didn't have enough intention for keeping manners in both boys and girls.

Key Words：information moral education, senior high school students, readiness, email, comparison of Chine and Japan
情報モラル教育、高校生、レディネス、電子メール、日中比較

1.緒言

情報モラルの問題は、その時代における社会の在り方やテクノロジーの状況と深く関わっていると思われる。そのため、我が国における情報モラル教育についても、刻々と変化する社会に対応するため、学習者のレディネスを把握するための様々な調査が行われている（小林ら（2000），鈴木ら（2006），三宅（2006），宮川・森山（2011），森山ら（2012a，2012b））。しかしながら、インターネットの世界において、情報モラルに関わる問題は、個々の地域や国家に限定されるものではない。したがって、個々の地域や国家における社会の特質に、よりグローバルな視点を加味した情報モラル教育の推進が重要になってくると思われる。

そこで、筆者ら（畑野ら、2018）は、前回、情報モラル教育における学習者のレディネスに関する日中比較として、中国の高校生の電子メール使用に対する意識を中心に報告した。そこで、情報モラルに関する前報と類似の先行研究を再検討するために、国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ（CiNii）に掲載されている文献に対して、「情報モラル　電子メール　中国」という検索語に限定して検索を行った。その結果、全文検索では20件、論文検索に限定すると畑野ら（2018）１件となり（2018年９月23日現在）、電子メール使用における情報モラルに焦点を当てた先行研究がみられるものの、さほど数多くはないようである。

具体的に、高校生の情報活用に関する日中比較研究をみてみる。林ら（2005）は、次のように述べている。「中国では、 国策による情報化促進に伴い、学校へのコンピュータ配置やネットワーク化、教員のIT研修等教育の情報化に向けた積極的な取り組みがうかがえる。反面、利用者の情報モラルやネット犯罪等情報の影に関する問題が表面化し、学校教育での対応が後手となっていることも否めない。日本では、文部科学省が示した情報教育の内容において、情報社会に参画する態度として情報モラルの必要性を提起し学習に位置付けている。中国では、情報化に関するこれら諸問題への対策が喫緊の課題である。」

また、高校生の情報活用に関する日中比較研究をみると、方ら（2005）は、日本と中国の「情報」に関する教科を学習している地方都市の大学進学率の高い高校生において調査した結果、情報活用の実践力

* 本学大学院教育学専攻教授　　** 本学大学院教育学専攻非常勤講師（兵庫教育大学大学院教授）
*** 西安交通大学事務局

に関しては両国に大きな差は見られなかったと報告している。また、情報モラルに関する意識については文化的要因から差が見られたが、両国とも基本的な情報モラルに関する意識が高いとは言い難い結果を示している。この報告は、10年以上前の状況に基づいているため、現在とは様々な状況が変化しているものの、当時から情報モラル教育について、より一層の充実が望まれていたことが示唆される。

また、中学生を対象としては、付・林（2006）の報告がみられる。具体的には、中国（黒龍江省）における中学校の生徒を対象にICTを利用した教育の現状に関して、ICT を利用した教育に対する生徒の関心、意欲等と実際の学習不足の矛盾や、コンピュータ、携帯電話等の情報メディアの広範的な利用と情報社会に参画する態度の学習欠如などを指摘している。このように、児童・生徒にケータイ使用が普及し始めた2004年頃に、ケータイ使用の情報モラルやマナーに関する指導に関しては、様々な問題点が指摘されている（畑野ら，2019）。

一方、2008年及び2009年の学習指導要領改訂以降に目を向けると、奥谷・鈴木（2010）は、アメリカ、北欧を中心としたＥＵ、東アジア（中国及び韓国）の学校教育における消費者教育の実践や教育内容、行政の取り組み等に着目し文献調査を実施している。その結果、クレジットや消費者信用、情報モラルといった教育内容は、どの国でも重視され、全ての子どもに教育をするという観点から日本でも義務教育で一層明確に位置づける必要があるとし、情報モラルに関する教育の重要性に言及している。

さらに、徐ら（2013）は、小学校における情報に関する教育を日中の教育課程を比較するとともに、両国における情報に関する教育の目標や学習内容についても比較している。その結果、教育内容についての類似点は多かったが、情報に関する教育のための具体的な授業時数を日本は規定していないのにもかかわらず、中国ではその授業時数が示されていた。さらに、両国の小学校における情報に関する教育用として出版されている教科書を事例として取り上げ、単元群毎の学習内容を列挙し、その構成を分析し、学習項目の割合を比較した。その結果、単元群毎の割合に大きな差異があり、とくに中国の教科書では、「情報社会に参画する態度」に対応する学習内容が日本と比較して著しく低いことが明らかにされた。このような国際的な観点からの研究では、本村ら（2010，2013）の一連の報告がみられる。本村ら（2010）は、日本・韓国・中国の学習内容の比較から我が国の体系的情報教育の在り方とカリキュラムの方向性を検討している。韓国・中国の中学生・高校生、米国の大学新入生に対しても調査を実施した。その結果、情報教育の要素である「情報の科学的理解」に関し、日本・中国の高校生より韓国の高校生が、中学からのカリキュラムが体系化されており、より良い理解度であった。また、学習活動は、日本や中国・韓国では認知的領域や情意的領域を重視するが、米国では精神運動的領域を重視する傾向があることが明らかとなった。

さらに、本村ら（2013）は、 日本・韓国・中国の中学生・高校生（以下、中高生）を対象に、情報活用能力の3観点に対する習得意欲及び情報関連用語に対する認知度を比較している。調査は、2009～2010年に、3カ国の中学生計465名、高校生計376名を対象に実施されている。その結果、情報教育における「情報活用の実践力」の習得、「情報社会に参画する態度」の形成に対する習得意欲では、いずれも日本の中高生の平均値が最も高くなった。しかし、日本の中高生は、「情報の科学的理解」に対する志向性が他の２観点に比べて相対的に低く、情報関連用語に対する認知度も韓国・中国に比べて最も低かった。これらのことから、我が国の情報教育は、韓国や中国に比べて教育課程上の位置づけが弱いため、中高生の意欲は高いものの、情報関連用語の認知形成を十分に達成できていない実態が明らかになった。このような国際的な視野により情報モラル教育における学習者のレディネスを把握する観点から、先報（畑野ら，2018）では、中国（吉林省）の高校３年生における日常生活での電子メールの利用状況の実態を把握した。その際、森山ら（2012a）の収集したデータのうち、特に日本（兵庫県）の高校３年生のデータのみを取り上げ、それらと調査結果を比較し、その特徴を検討した。その結果、中国（吉林省）の高校３年生は日本（兵庫県）の高校３年生よりも、電子メールの重要性を強く認識している一方で、電子メールによるコミュニケーションの質の低下をあまり意識していない傾向が示唆された。その反面、中国（吉林省）の高校３年生は日本（兵庫県）の高校３年生に比べて電子メール使用に関わるトラブル経験が多い実態が把握された。

しかし、このように電子メール使用に関わるトラブル経験が多い実態を明らかにすることができたものの、それらトラブルの詳細については、未検討で

表１　調査対象者及び有効回答（中国吉林省の高校３年生）

	調査対象			有効回答			有効回答率
	男子	女子	計	男子	女子	計	
A高校	30	43	73	30	36	66	90.4%
B高校	40	54	94	38	42	80	85.1%
C高校	40	43	83	39	34	73	88.0%
全体	110	140	250	107	112	219	87.6%

あった。そこで、このような電子メール使用に関わるトラブル経験の実態について、詳細に検討することとした。その際、まず先に、電子メールに対する利点・欠点認識（畑野ら，2019）に関して、中国と日本の高校３年生を対象に検討した。本報では、さらに、電子メールに対する高校３年生のマナー意識の実態を把握すると共に、電子メールに対する利点・欠点認識とマナー意識間の関連性について、中日両国の高校３年生の実態を比較・検討することとした。

２.研究方法

２.１　調査対象

調査対象は、先報（畑野ら，2018）と同じ中国・吉林省・長春市内の公立高等学校３校の３年生計250名とした。有効回答は計219名（男子計107名，女子計112名，有効回答率87.6%）である。本調査対象は、中学校では「インターネット利用基礎」、高校では「情報技術基礎」をそれぞれ既習である。調査対象者及び有効回答を表１に示す。

日本の高校生は、森山ら（2012）の収集した日本（兵庫県）の高校生のデータの中でも３年生のデータを抽出した。具体的には、有効回答計は計134名（男子計56名，女子計78名，有効回答率98.5%）であった。

２.２　調査項目

調査項目は、森山ら（2012）の調査項目に基づいて、マナー意識の設問を設定した。これらの項目については、次に示す通りであった。

電子メール使用時のマナー意識を把握する項目

電子メール使用時のマナー意識では、「電子メールの使用に対して、どの程度次の項目のマナーに対して考慮していますか」という質問に対して、次の計８項目に対するあてはまる程度を回答させるものとした。回答は、「４そう思う」、「３少しそう思う」、「２あまりそう思わない」、「１まったく思わない」の４件法とした。

①文章を相手の分かりやすいように作成している
②相手の立場、状況、時間帯に気をつけている
③チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている
④相手に失礼にならないように、文章の言葉遣いに気をつけている
⑤絵文字や顔文字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている
⑥送信する前に読み返すなど、相手に自分の言いたいことが伝えるか確認するようにしている
⑦質問に答えてもらったら必ずお礼をするなど、礼儀を守るようにしている
⑧メールをむやみに送りすぎないようにしている

２.３　調査の手続き

調査は、2011年８～９月に実施した。調査は、各調査対象校の担当教員に依頼し、実施した。調査後、設問ごとに尺度平均値を求め、マナー意識の実態を日本の高校３年生（男子56名，女子78名，計134名）のデータと比較した。なお、それら高校生の学習経験に関しても、調査した。その後、先報（畑野ら，2018）の結果で得られた利点・欠点認識を説明変数として用い、マナー意識を基準変数とする重回帰分析を行い、影響力の違いを日中間で比較した。

３．結果と考察

３.１　調査対象者の学習経験の状況

まず、調査対象者の学習経験の状況を把握するために、当時の中国吉林省の高校「情報技術基礎」の教科書における情報モラルに関する学習内容の記述内容を分析した。また、同省長春市内の高校３年生（N=219）を対象に、情報モラルに関する学習経験の実態を把握した。その結果、「情報技術基礎」の教科書には、情報モラルに関する学習内容がマナーから法律に至るまで幅広く取り上げられていることが明らかとなった。これに対して同省の高校３年生を対象とした調査の結果、98.6%の生徒が情報モラルに関する学習経験を小学校高学年から中学１年生

表２　電子メールに対するマナー意識尺度の平均値

マナー意識		中国	日本	t 検定
男子	平均	2.89	3.35	t(161)=7.17 **
	S.D.	0.36	0.44	
女子	平均	2.89	3.50	t(188)=10.49 **
	S.D.	0.39	0.40	
全体	平均	2.89	3.44	t(351)=12.87 **
	S.D.	0.37	0.42	

** p<.01　　4段階法

表３　電子メールに対するマナー意識尺度における各項目の平均値（全体）

		中国 (N=219)	日本 (N=134)	t検定
文章を相手の分かりやすいように作成している	平均	2.89	3.46	t(351)=7.07 **
	S.D.	0.75	0.71	
相手の立場，状況，時間帯に気をつけている	平均	2.91	3.16	t(351)=3.08 **
	S.D.	0.74	0.74	
チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている	平均	2.87	3.59	t(325)Welch=8.93 **
	S.D.	0.83	0.67	
相手に失礼にならないように，文章の言葉遣いに気をつけている	平均	2.89	3.41	t(351)=6.37 **
	S.D.	0.77	0.70	
絵文字や顔文字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている	平均	2.98	3.51	t(351)=6.18 **
	S.D.	0.79	0.77	
送信する前に読み返すなど，相手に自分の言いたいことが伝えるか確認するようにしている	平均	2.87	3.47	t(351)=7.04 **
	S.D.	0.81	0.72	
質問に答えてもらったら必ずお礼をするなど，礼儀を守るようにしている	平均	2.93	3.46	t(321)Welch=6.35 **
	S.D.	0.85	0.70	
メールをむやみに送りすぎないようにしている	平均	2.82	3.44	t(318)Welch=7.94 **
	S.D.	0.79	0.66	

** p<.01　4段階法

表４　電子メールに対するマナー意識尺度における各項目の平均値（男子）

		中国 (n=107)	日本 (n=56)	t検定
文章を相手の分かりやすいように作成している	平均	2.86	3.37	t(161)=4.10 **
	S.D.	0.77	0.72	
相手の立場，状況，時間帯に気をつけている	平均	2.85	3.04	t(161)=1.46 ns
	S.D.	0.74	0.87	
チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている	平均	2.84	3.36	t(161)=3.77 **
	S.D.	0.80	0.90	
相手に失礼にならないように，文章の言葉遣いに気をつけている	平均	2.92	3.19	t(161)=2.06 *
	S.D.	0.78	0.82	
絵文字や顔文字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている	平均	2.97	3.32	t(161)=2.63 **
	S.D.	0.77	0.87	
送信する前に読み返すなど，相手に自分の言いたいことが伝えるか確認するようにしている	平均	2.93	3.27	t(161)=2.43 *
	S.D.	0.84	0.86	
質問に答えてもらったら必ずお礼をするなど，礼儀を守るようにしている	平均	3.00	3.25	t(161)=1.85 ns
	S.D.	0.80	0.85	
メールをむやみに送りすぎないようにしている	平均	2.84	3.18	t(161)=2.58 *
	S.D.	0.80	0.80	

** p<.01　4段階法

の時期を中心に学習している実態が把握された。しかし、学習した情報モラルのトピックにはばらつきがあり、「プライバシーの保護」、「個人情報の保護」、「情報の信頼性」についての学習は充実しているものの、その他のトピックに対する学習は十分とはいえない状況が示唆された。これらのことから中国の情報モラル学習には、学習する時期と内容に極端な偏りが生じている可能性が危惧される。

3.2　電子メール使用時のマナー意識の状況

まず、電子メールに対する利点認識の状況について集計した。尺度全体の平均値について中国の高校3年生と日本の高校3年生を比較した（表２）。その結果、マナー意識全体では、中国の高校3年生の方が日本の高校3年生よりも平均値が有意に低かった（中国:2.89，日本:3.44）。

次に、項目別に平均値を集計し、中国・日本の高校3年生別に、顕著な傾向を持つ項目に着目した

表５　電子メールに対するマナー意識尺度における各項目の平均値（女子）

		中国 (n=112)	日本 (n=78)	t検定
文章を相手の分かりやすいように作成している	平均	2.90	3.56	t(188)=6.36 **
	S.D.	0.75	0.63	
相手の立場，状況，時間帯に気をつけている	平均	2.96	3.21	t(188)=2.20 *
	S.D.	0.74	0.81	
チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている	平均	2.88	3.62	t(185)Welch=6.49 **
	S.D.	0.88	0.69	
相手に失礼にならないように，文章の言葉遣いに気をつけている	平均	2.85	3.44	t(188)=5.35 **
	S.D.	0.78	0.70	
絵文字や顔文字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている	平均	2.98	3.66	t(187)Welch=6.60 **
	S.D.	0.82	0.60	
送信する前に読み返すなど，相手に自分の言いたいことが伝えるか確認するようにしている	平均	2.81	3.56	t(188)=6.87 **
	S.D.	0.78	0.68	
質問に答えてもらったら必ずお礼をするなど，礼儀を守るようにしている	平均	2.87	3.56	t(188)=6.53 **
	S.D.	0.77	0.63	
メールをむやみに送りすぎないようにしている	平均	2.79	3.32	t(188)=4.82 **
	S.D.	0.77	0.71	

** p<.01　4段階法

（表３，表４，表５）。その結果、中国の高校３年生では、「絵文字や顔文字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている」（平均値:2.98）、「質問に答えてもらったら必ずお礼をするなど、礼儀を守るようにしている」（平均値:2.93）などの項目において平均値が高かった。しかし、「メールをむやみに送りすぎないようにしている」（平均値:2.82）などの項目においては平均値が低かった。一方、日本の高校３年生では、「チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている」（平均値:3.59）、「絵文字や顔文字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている」（平均値:3.51）などの項目において平均値が高かった。しかし、「相手の立場、状況、時間帯に気をつけている」（平均値:3.16）などの項目においては平均値が低かった。

さらに、各項目別に中国の高校３年生と日本の高校３年生の平均値を比較した。その結果、全体では全ての項目においていずれも中国の高校３年生の平均値が日本の高校３年生に比べて有意に低かった。特に、顕著な差異の認められた項目は、「チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている」（中国:2.87，日本:3.59）、「メールをむやみに送りすぎないようにしている」（中国:2.82，日本:3.44）、「送信する前に読み返すなど、相手に自分の言いたいことが伝えるか確認するようにしている」（中国:2.87，日本:3.47）などであった。

同様の分析を男女別に行った。その結果、男子では全ての項目においていずれも中国の高校３年生の平均値が日本の高校３年生に比べて有意に低かった。特に、顕著な差異の認められた項目は、「チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている」（中国:2.84，日本:3.36），「文章を相手の分かりやすいように作成している」（中国:2.86，日本:3.37），「絵文字や顔文字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている」（中国:2.97，日本:3.32）、「相手に失礼にならないように、文章の言葉遣いに気をつけている」（中国:2.92，日本:3.19）、「送信する前に読み返すなど、相手に自分の言いたいことが伝えるか確認するようにしている」（中国:2.93，日本:3.27）、「メールをむやみに送りすぎないようにしている」（中国:2.84，日本:3.18）などであった。これに対して女子では、全ての項目においていずれも中国の高校３年生の平均値が日本の高校３年生に比べて有意に低かった。特に、顕著な差異の認められた項目は、「送信する前に読み返すなど、相手に自分の言いたいことが伝えるか確認するようにしている」（中国:2.81，日本:3.56）、「チェーンメール等の迷惑メールに対して適切な対処をしている」（中国:2.88，日本:3.62）、「質問に答えてもらったら必ずお礼をするなど、礼儀を守るようにしている」（中国:2.87，日本:3.56），「絵文字や顔文字等を使用して自分の気持ちを表現するようにしている」（中国:2.98，日本:3.66）などであった。

これらの結果から、中国の高校３年生は日本の高校３年生に比べて、電子メールに対するマナー意識が十分に形成されていない傾向が示唆された。

３.３　電子メールに対する利点・欠点認識がマナー意識に及ぼす影響

以上に把握された電子メールに対する意識の実態に基づいて、電子メールに対する利点・欠点認識（畑野ら，2018）とマナー意識との関連性を検討し

表６　マナー意識に対する利点・欠点認識の影響力（重回帰分析・中国）

	n	標準偏回帰係数		重相関係数	F値
		利点認識	欠点認識		
全体	219	0.05	0.57 **	0.56	F(2,216)＝49.50 **
男子	107	0.06	0.51 **	0.50	F(2,104)=18.13 **
女子	112	0.01	0.59 **	0.59	F(2,109)=30.36 **

** p<.01　4段階法

表７　マナー意識に対する利点・欠点認識の影響力（重回帰分析・日本）

	n	標準偏回帰係数		重相関係数	F値
		利点認識	欠点認識		
全体	134	0.27 **	0.28 **	0.42	F(2,131)=14.54 **
男子	56	−0.01	0.41 **	0.41	F(2,53)=5.40 **
女子	78	0.25 *	0.20	0.33	F(2,75)=4.87 **

** p<.01 * p<.05　4段階法

た。具体的には、電子メールに対する利点・欠点認識を説明変数、マナー意識を基準変数とする重回帰分析を行った（表６，表７）。その結果、全体では中国の高校３年生（R=0.56, F（2,216)=49.50, p<.01)、日本の高校３年生（R=0.42, F（2,131)=14.54, p<.01)共に有意な重相関係数が得られた。男女別の重回帰分析においても同様に、有意な重相関係数が得られた。なお、いずれの重回帰分析においてもVIFは1.00〜6.00と十分に低く、多重共線性は認められなかった。

そこで、得られた標準偏回帰係数をパス係数とするパスダイアグラムを図１〜図６に作成した。その結果、全体では、中国の高校３年生においてマナー意識に対する利点認識の影響力は認められず欠点認識からの影響力（β=0.57）のみが認められた。これに対して日本の高校３年生では、マナー意識に対する利点認識の影響力（β=0.27)、欠点認識の影響力（β=0.28）が弱いながらも共に認められた。しかし、男女別では、この傾向は日本の女子においてのみ認められた。

これらの結果から、日本の高校３年生のうち、特に女子では電子メールの利点を生かしつつ欠点を抑制するためにマナー意識を形成するのに対して、中国の高校３年生は男女共に電子メールの欠点の抑制のみに着目してマナー意識を形成していることが推察された。

ここで、本研究で得られた知見に関して、電子メールに関する先行研究を照らし合わせてみてみると、まず、本研究の質問項目などをベースとした森山ら（2012）の研究があげられる。その研究では、携帯電話を用いたコミュニケーションに焦点を当て、高校生の電子メールに対する利点・欠点認識がマナー意識の形成に及ぼす影響について検討されている。具体的には、高校生計728名を対象とした調査から、主に携帯電話を用いて電子メールを使用していると回答した高校生計658名を分析の対象としている。その結果、使用頻度の多い生徒、トラブル経験の多い生徒、重要性認識の強い生徒ほど、それぞれ利点認識が強くなる傾向を認めている。しかし、欠点認識とマナー意識には同様の関連性はいずれも認められず、電子メールでトラブルを経験しながらもその重要性を認識し、より頻繁に利用するヘビーユーザほど、電子メールの利点を強く認識していることを報告している。（特に、使用頻度の少ない生徒では利点認識の影響力が消失する一方で、使用頻度とトラブル経験が共に多いヘビーユーザの生徒においては、逆に利点認識の影響力が強まる傾向がそれぞれ示された。）

本研究においては、電子メール使用におけるマナー意識を利点欠点認識から検討するという点では、森山ら（2012a）の研究と同様の方法であったものの、その対象者が中国（吉林省）の高校３年生であった。そして、男女別に中国と日本の高校３年生を比較し、調査対象者に限界があるものの、高校生の電子メールに対する利点・欠点認識がマナー意識の形成に及ぼす影響に関しては、一定の知見が得られた。しかしながら、本研究で得られた生徒の実態の背後にある要因についてさらに詳細な検討を行っていく必要

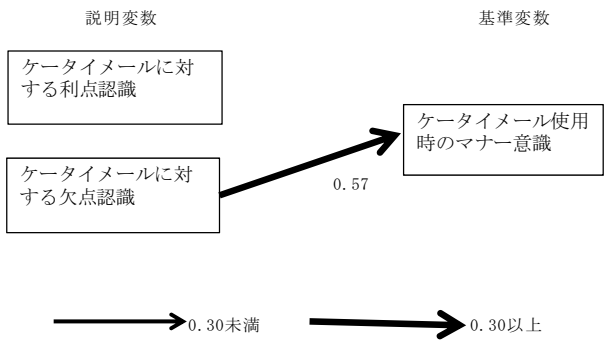

図１　マナー意識と利点・欠点認識とのパスダイアグラム（中国・全体）

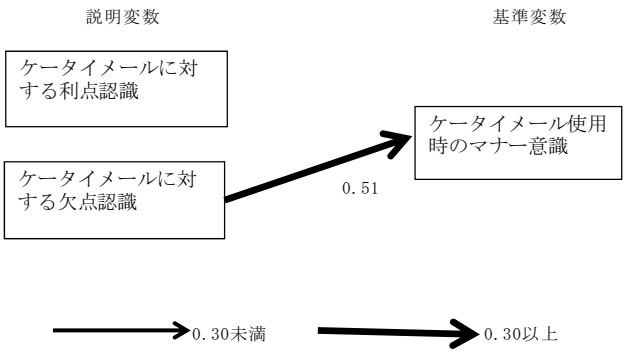

図２　マナー意識と利点・欠点認識とのパスダイアグラム（中国・男子）

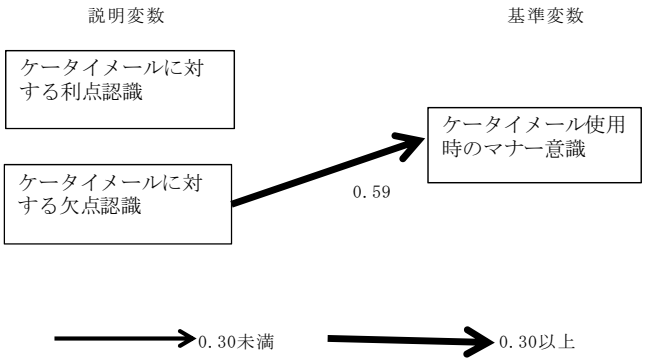

図３　マナー意識と利点・欠点認識とのパスダイアグラム（中国・女子）

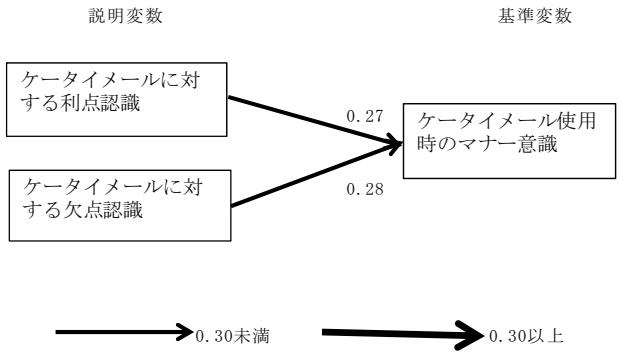

図４　マナー意識と利点・欠点認識とのパスダイアグラム（日本・全体）

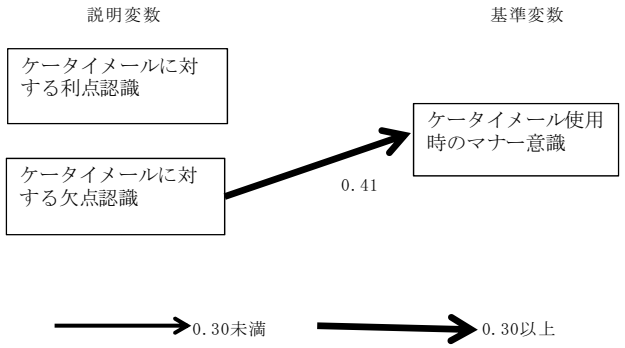

図5　マナー意識と利点・欠点認識とのパスダイアグラム（日本・男子）

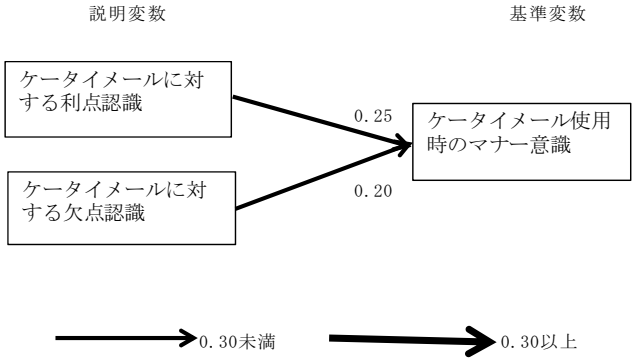

図6　マナー意識と利点・欠点認識とのパスダイアグラム（日本・女子）

があろう。

以上、得られた結果から、電子メールに対する情報モラルについては、日中両国の意識実態に差異が認められるものの、両国共に情報モラルに関する知識や経験が電子メールに対する意識を促す要因として重要な役割を果たしていることが明らかとなった。特に、中国の情報モラル学習においては、情報モラルに対する適切な態度をコミュニケーションの文脈から捉えさせる学習指導の工夫の必要性である。既報（畑野ら2018，2019）において、中国の高校3年生は日本の高校3年生に比べて、電子メールの使用頻度の高いヘビーユーザが多く、トラブル経験も多い実態が把握された。また、電子メールに対する利点認識を強く意識している反面、欠点認識が弱く、電子メール使用時のマナー意識も十分に形成されていない傾向が示唆された。とりわけ、電子メールの重要性を強く認識している一方で、電子メールによるコミュニケーションの質の低下をあまり意識していない傾向、電子メールの欠点の抑制のみに着目してマナー意識を形成している傾向からは、電子メールのマナーを単なる端末操作のハウツーとして認識している可能性が危惧される。言い換えれば、電子メールの向こう側にいる人との関係性やコミュニケーションの質などがマナー意識の形成と適切に結びついていないのではないかと考えられる。これには様々な原因が考えられるが、その一つとして情報モラル学習の指導方法の問題が考えられる。

事例ではあるものの、当時の中国の高校教科「情報技術基礎」において、情報モラルに関する学習内容をみると、（教科書「情報技術基礎」，廣州基礎教育課程資源研究開発中心情報技術教材編写組編著，廣州教育出版社出版，2006年7月第2版，2010年7月西安第4次印刷）、中国の情報教育における教科書記述では随所に、インターネット利用時の注意点について述べられている。しかし、これらの注意点を単なる知識として教授しただけでは、生活の中での行動としてマナー意識の形成にまでは至っていないと考えられる。なお、調査対象者の情報教育に関する学習経験の把握からも、中国の情報モラル学習には、学習する時期と内容に極端な偏りが生じている可能性が危惧される。

カリキュラム・スタンダードを手掛かりとした研究では、中日の情報教育の相違点として、中国ではプログラミングの知識と技能を重視していることを明らかにしている。したがって、今後中国の情報モラル学習を推進していくためには、単なる知識の教授ではなく、問題解決的な学習活動や疑似的なメディアコミュニケーションの体験を導入するなど、情報

モラルの重要性について生徒が自ら「考える」学習指導方法を改善していく必要があろう。

以上のような点を踏まえ、今後の中国における情報モラル学習を推進していくためには、生徒の情報モラルの実態や学習成果の状況を継続的に評価し続けることが重要と思われる。

6　文献

中国互联网絡：信息中心:第30次中国互換網発展状況統計報告,http://www.cnnic.net.cn（最終アクセス:2012.12.20）.

中国教育部：中华人民共和国华务教育法，http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_619/200606/15687.html（最終アクセス:2017.1.9）.

中国国家教育発展研究中心（2000）中国教育緑皮書，教育科学出版社，pp.55-62.

廣州基礎教育課程資源研究開発中心情報技術教材編写組編著，教科書「情報技術基礎」，廣州教育出版社出版，2006年７月第２版，2010年７月西安第４次印刷.

中国教育部全国中小学教師継续教育網:中小学信息技术课程指导纲要，http://training.teacher.com.cn/information/center/StudyGuide/zhuanti/jxrd/xxjsz（最終アクセス:2012.12.20）.

中华人民共和国教育部，http://www.moe.gov.cn（最終アクセス:2017.1.9）.

中央政府網　国务院关于深入推进义务教育均衡发展的意见，http://www.gov.cn/gongbao/content/2012/content_2226138.htm（最終アクセス:2017.1.9）.

付婷婷・林　徳治（2006）中国におけるICTを利用した教育の現状と課題，日本教育情報学会論文集，22：272-273.

畑野裕子・森山潤・金楠（2018）情報モラル教育における学習者のレディネスに関する日中比較－中国の高校生の電子メール使用に対する意識を中心に－，神戸親和女子大学大学院研究紀要，14：55-62.

畑野裕子・森山潤・金楠（2019）電子メールに対する利点・欠点認識からみた中国における情報モラル教育の検討－中国吉林省の高校生を対象とした調査から－，児童教育学研究，38：219-229.

畑野裕子・森山潤・金楠（2019）中国の情報教育における情報モラルに関する学習の状況－中国吉林省の高等学校「情報技術基礎」の教科書を事例として－，教職課程・実習支援センター研究年報　2：129-137.

林徳治・慮雷・黒川マキ・井上史子原田　肇（2004）ICTの教育利用に関する調査研究：中国における学校視察および意識調査を通して（電子コミュニケーション），日本教育情報学会論文集，20：172-175.

林徳治・慮雷・黒川マキ・井上史子（2005）ICTの教育利用に関する日中の比較調査研究: 中国山東省済南市を対象として，日本教育情報学会論文集，21-1：3-13.

一見真理子・鬼頭尚子（2002）中国におけるメディア・リテラシー教育，生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究最終報告書－比較教育編－，国立教育政策研究所，pp.128-129.

徐俊青・古川武・伊藤陽介（2013）小学校における情報に関する教科書の日中比較と分析，鳴門教育大学情報教育ジャーナル，3：10.

吉林省教育厅:吉林省教育信息網，http://www.jiedu.gov.cn（最終アクセス:2012.12.20）.

小林久美子・坂元章・森　津太子他（2000）情報化社会レディネス尺度の作成および信頼性・妥当性の検討．教育システム情報学会誌，17-4：521-532.

黄海湘・和田勉・立田ルミ（2014）初等教育における情報教育の国際比較－中国と日本－，情報学研究，136-142.

廣州基礎教育課程資源研究開発中心情報技術教材編写組（2010）高校教科書「信息技術（必修）信息技術基礎」，廣州教育出版社，西安第４次印刷.

文部省（1999）高等学校学習指導要領.

文部科学省（2002）情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～.

本村猛能・工藤雄司・山本利一・森山潤・角和博（2010）我が国の体系的情報教育の在り方とカリキュラムの方向性：日本・韓国・中国の学習内容比較検討，日本教育情報学会論文集，26：274-275.

本村猛能・森山潤・山本利一・角和博・工藤雄司（2013）中学・高校生の情報活用能力の習得意欲及び情報関連用語に対する認知度に関する日

韓中比較，教育情報，28-4：3-14.
三宅元子（2005）中学・高校・大学生の情報倫理に関する意識の分析，日本教育工学会論文誌，29-4：535-542.
三宅元子（2006）中学・高校・大学生の情報倫理意識と道徳的規範意識の関係，日本教育工学会論文誌，30-1：51-58.
宮川洋一・森山潤（2011）道徳的規範意識と情報モラルに対する意識との関係－中学校学習指導要領の解説「総則編」に示された情報モラルの考え方に基づいて－，日本教育工学会論文誌，35-1：73-82.
森広浩一郎・安木良・正司和彦・西村治彦（2004）電子メール経験のポートフォリオ化による情報モラル育成のための学習支援システム開発に向けた授業実践，日本教育工学会，27：109-112.
森山潤・川上達大・中原久志・上之園哲也（2011）テキストマイニングを用いた高校生の電子メールに対する意識の分析，兵庫教育大学研究紀要，38：127-135.
森山潤・川上達大・中原久志・上之園哲也・萩嶺直孝（2012）高校生の電子メールに対する利点・欠点認識がマナー意識の形成に及ぼす影響，学校教育学研究，24：81-89.
森山潤・川上達大・中原久志・上之園哲也・萩嶺直孝（2012）高校生の電子メールに対する意識と共感経験との関連性，兵庫教育大学研究紀要．40：139-143.
奥谷めぐみ・鈴木真由子（2010）アメリカ・EU・東アジアの消費者教育と日本の課題　大阪教育大学紀要 第5部門教科教育，59-1：51-69.
シリフグリキラム・菊地章（2005）情報教育の国際比較，鳴門教育大学情報教育ジャーナル　2：31-39.
鈴木佳苗・大貫和則(2006) インターネット上での対人関係で重視される社会的スキル－高校生に対する調査－，日本教育工学会論文誌，30：117-120.
楊導核（2005）高等学校における情報教育の中日比較（1），学習指導要領の比較を手がかりに．日本科学教育学会論文集，29：401-402.
楊導核（2006）高等学校における情報教育の中日比較（2），教科書の比較を辛がかりに．日本科学教育学会年会論文集，30：205-206.